

幻想を映す水溜り

BNKN

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こちら東方Projectの二次創作短編SS集になります。

全ての話は一話完結であり、話同士での関連性はありません。ジャンルも話によりけりです。

思いつきの一発ネタや独自解釈があります。

目次

舌切りサグメと夢食いドレミー	1
キスメパニツク!	19
リードの先には	32
幽々子様は死んでみたいっ!	53
無限のトートロジー	67

舌切りサグメと夢食いドレミ

月——地上からおよそ38万km離れた穢れのない浄地。

遠い昔、それこそ神代の時より遙か遡った太古の地球で一つの文明が生まれ、そして有り得ない速度で発達していった。ある種、科学の飽和状態と化した地上。その際限のない、無秩序とも言える程の無謀で傲慢な好奇心が「死」に目を向けた事も疑問に思うところはない。

「死」を理解し、理論を確立していくと人々は「死」やそれに携わる物に忌避感を感じる様になっていった。しかし、「死」についての理解が一般市民達にまで浸透した時には既に地上は穢れが満ちていた。そこで、彼らは新たな土地に、それも穢れの無い理想の土地に、その生活を移した。

その理想の土地こそ月だったのだ。

○

「失礼しました」

今、一匹の玉兎が書類を脇に抱えて出ていった。私はそれを黙って見送る。

「……」

お気に入りの椅子から立ち上がって窓の向こうを覗いても見えるのは月の都の人工的な建物ばかり。別にそれが不満という訳じゃないが味気無さは否めない。

「失礼します。珈琲をお持ち致しました」

今度は別の玉兎が部屋に入ってきた。ここで少し要らぬ話をするなら、私の部屋には扉が無い。というのも、私は私の舌が引き起こす現象にセーブが効かないのだ。その現象というのは、また厄介な物で。私が言及した事柄について、到達するであろう運命の着地点を逆転させてしまうのだ。例えば明日が晴れる運命だとして、私が明日の天気について少しでも語ると明日は雨模様となる。これを見境なく引き起こしてしまう。

これのせいで、私は下手に喋れないのだ。なので私は普段から口を使う機会を減らす様にしてている。扉の話にしたってそうだ。扉があるとここへ来る玉兎達がノックをしてくれるわけだが、私がそれに応えられない。一々、席を立って扉を開けるのも何だかなという事で、ならいつそ取っっちゃえという事で扉のない執務室が出来上がったわけだ。

「ここに置いておきますね」

薄青い髪をボブカットにした可愛らしい顔立ちの玉兎は私専属の秘書みたいなもの

だ。すっかり顔馴染みだが会話をした事はほぼ無い。何十年と顔を付き合わせているのに会話したのは百にも満たないかも知れない。この玉兔も私の舌の事は知っているから余程の事が無い限り、私が返事をしなければならぬ様な話題は振ってこない。大抵は今の様に簡易な報告になる。言葉は伝えられないけれど私が会釈で感謝を示すと玉兔は笑顔を見せて部屋から出ていった。

「……………」

こんな静かな生活にも慣れた。慣れたけれど極たまに虚しくなる。誰かと心行くまでお喋りしてみたいと思う事だつてある。

「……………」

どうやら砂糖を入れ忘れていたらしい。

私は珈琲の苦味の残る舌を少し出した。

その日、夢を見た。

酷く浩々とした月面。乱雑に突き刺さった何本もの標識にはバツ印が刻まれているのが伺える。その中に建てられた一軒家の中に私はいた。どこから届けられたのかも分からない、少し擦り切れた新聞紙には今日あつた出来事が淡々と記されている。

『朝の寝覚めが悪かった』

『机の角に小指をぶつけた』

『秘書の子が砂糖を入れ忘れていた』

ああ、そんな事もあったな。何処か一步距離を置いての視線になるのは此処が夢の世界である事がわかつているからだろうか。

珈琲の記事を読んだ時にふと、珈琲が飲みたくなつた。私はいつの間にか置かれていた湯気立つ珈琲カップを傾けた。なんとも便利なものだ。

私がこの世界に来てどれだけ時間が経つたのだろうか。自分の記事を読むのは何だか気恥ずかしくて細かい所迄は読んでいない。でもそうなると私にはやる事が無くなってしまう。意味もなく身嗜みを整えたり、内容を覚えている本を読み直したり。：途方もなく、やる事が無い。

一度、この一軒家から出てみようかと玄関の扉を押しても欠片も動いてはくれなかった。

ピ。ピ。ピ。ピ。

枕元で鳴る目覚まし時計に手を伸ばして、半ば叩くようにして時計を黙らせる。

「……」

夢の内容は大抵は起きた時には忘れてしまっているものだが今日はそんな事無かつたらしい。最後に何をしていたかまでは曖昧だが、それまでの記憶ならすっかりしている。

ベッドから降りて洗面台の大鏡に映る自分は頭が跳ねている上に瞼は落ちかけていて酷く間抜けに見えた。

「どことなく気分がいい私は秘書の玉兔に話しかけてみた。

「……き、今日は砂糖をお願いね」

「おいおい。確かにあまり喋りなれていないとは言え、蹴躓く事はないだろ。秘書の子も少し驚いているじゃないか。」

「もしかして昨日、入れ忘れてましたか？」

照れる様な、焦るような笑いを見せながら聞き返してくれる。

それに私は頷いて返す。口が詰まったのが恥ずかしくて「うん」とか「そうなの」とか単純な言葉も咄嗟に出てこなかった。情けない話だ。

「すいません。気を付けますねっ」

「……気にしなくて、いい」

よし、今度はちゃんと返せた。

その日の見出しは

『秘書の子と少し話せた』だった。

夢の中で私の新聞を読むことを繰り返していくにつれて秘書の子と話す時間はほんの少しずつ増えていった。と言っても他愛ない挨拶ばかりではあったが。

でも私にとってのはたとえそんな些末な言葉のやり取りであれ、慣れないもので、楽しい物だった。

だからこそ私も、もしかしたら彼女ですらも油断していたのかも知れない。

その日、秘書の子から大したことじゃないが話があるとされたので時間を空けておいた。私が待っていると何時ものように珈琲を持った秘書の子が入ってきて、私と彼女

の前に置いた。

小さく「ありがと」と言つて珈琲カップを口に運ぶ。

うん、今日の珈琲も甘くて美味しい。

「えと、それでお話つて言うのはですね」

「うん」

「私、来月でこの仕事を辞めさせて貰いたいと思います」

「え……」

突然の事で驚いた。何か気に入らない事があつたのだろうか。

「な、何か気に入らない事でも……」

口に出していた。

それに秘書の子は笑いながら首を横に振る。じゃあ一体何があつたのだろうか。

「いえ、私結婚するんです」

「そ、そうなんだっ…… えつと式はいつ？」

良かった。これで私が入らないとかだつたら私はもう立ち直れなかった。スピーチとかは無理だけど式典に出席くらいはしたいなあ。

「来月の第三木曜日です」

「ぜ、絶対行くつ。行くからつ」

「ふふつ有難うございます」

そう言つて笑う彼女は私が見たどの笑顔よりも輝いて見えた。

その日の一面は言うまでもないだろう。

ただ一つ、私は新聞端のこれからの天気に傘マークが並んでいる事が無性に気になつた。

風の噂で耳にした。

式典が中止になつたらしい。彼女のフィアンセが亡くなつたそうだ。それを聞いた私は正しく声を失つた。そこに至つて漸くわかつた。

これは全て私のせいだと。

気が緩んでいた。少し取り留めのない話が出来るからと調子に乗つた結果がこれだ。

私は謝りに行くのが怖かつた。間違ひなく嫌われてしまう。鉄の靴を履いている様に重だるい足を動かして私は彼女の元へと向かつた。

彼女は泣いていた。私が謝ると無理に笑顔を作つて「貴方のせいなんかじゃありません

ん」と言った。口ではそう言ってくれるが心では納得出来ていないはずだ。

あれは私のせいだ。

間違いなく。

気まずい空気の中、少し噛んだ舌先に鉄は鉄の香りが漂っていた。

その日の夢に新聞は置いていなかった。外で大雨が降っているから届けに来れなかったのだろうか。まあ誰が届けているというわけじゃないのだろうか。

代わりに机の上に置いていたのは大きめのペンチと肉切り鋏。

言わんとしている事はわかる。これは私の夢なのだからきつと夢の中でくらい自分を罰せと言っているのだろうか。

夢の中で死んだらどうなるのだろうか。目覚めて終わりだろうか。もうここへは来れなくなるのだろうか。

まあ、なんにせよ私に選択肢はない。私の命を摘み取る為の鋏はとても軽く感じた。

ピンポーン

「いめんください」

左手にペンチ、右手に鋏を持った状態で止まる。ここに私以外の誰かが来たことなど一度もない。インターフォンが鳴った事もない。ペンチと鋏を机の下に隠すように置いて私は玄関へと向かった。

以前、押してもびくともしなかつた扉は生意気にも音も立てずに開いた。

「ああ、良かった。開けてくれないかと思いましたがよ」

そう言う女性は黒と白のゆつたりとした服に下地と反対色の毛玉が沢山着いた妙な服を着ている。腰のあたりからスラリと細い尻尾が見えているところを見ると何かの妖怪だろうか。そして、その手には黒革金字の高級そうな本を握りしめている。

ただ、そんなことよりも気になったのが、

「ええ、すみません。少々雨宿りさせてもらえませんか。今日になって突然、降ってきてまして」

彼女は全身びしょ濡れであった。

「いやあ、すみませんね。お邪魔しちゃって」

「……」

「それにしても、どうしたんですかねえこの雨」

「……」

「ああ、そうだ。名乗るのが遅れてしまいました。私、ドレミー・スイートと申します。気軽にドレミーとでもお呼び下さい」

ドレミーと名乗る彼女がこの家に行くと直ぐに水滴が弾けて乾いた。よく分からない仕様だ。

「それと貴女のお名前は存じますので自己紹介は不要です」

何故、知っているのだろうか。というかまず何者何だか。

「…… 貴女は何者？」

「ええ、ドレミー・スイートと申します」

そんな事は分かっている。

私が首を横に振ると彼女は納得するように頷いた。

「しがない猿であります。以後お見知りおきを」

猿、猿か。猿といえど夢を食べてしまう妖怪だったろうか。

考えるように黙っていると彼女が口を開いた。

「気にしておられる様ですので申し上げますと、此処は夢の中ですので貴女の舌が此処に何らかの影響を及ぼす事は有りませんよ」

「……」

「むう、信じてませんね。まあ、いきなりこう言われても信じられないでしょうね」
妙に此処に詳しい。私ですら此処が一体何なのか充分に把握しているわけではない
というのに。

「…貴女は何故ここに？」

「私は獺ですから、それらしくお食事処を探していましたら突然雨に振られました」

「ここを食べに来たのね」

「いいえ？別に食べても良いですが貴女が困るでしょう？」

困る… 困るか。どうだろう。

無くなったところで私の現実にはなんの問題もない筈だ。私は首を横に振った。

「おや、そうですか？自分を見直すために貴女が作り出したんですよ？」

「私が？」

「ええ、貴女が。夢は記憶の整理なんてよく言われますがそれはあなたが嘘でもないの
です。記憶を遡る事で自らを客観的に見つめ直せる場所が夢なのです」

そうか。あの新聞はそういう事だったのか。見つめ直す為の鏡だったのか。だが、新
聞はこの家に存在しない。

「そうですね。今日の新聞が発刊されていないのは私が食べてしまったからです」

「はっ。」

「僕は何でもかんでも夢を食い散らかしていると思われがちですが、それは誤りです。僕は悪夢しか食べない、非常に好意的な妖怪なのです」

得意気に語るドレミー。自分で言うか。

「貴女の新聞も毎日詰まらない記事ばかりでしたが、今日のは素晴らしかったですよ」

こいつ、今まで全部、覗き見ていたのか。

「……そう。私の夢は美味しかった？」

何だろう。腹が立っている様な、から回る様な脱力感から口が開いてしまう。

「まだ、食べきってません。だからこんな物がここに置いてあるのです」

そう言う彼女の手には先程隠したペンチと鋏。

「それを食べられたら、私は私を見つめ直せないわ」

それは私を罰するのに必要な物なのだ。失くしてしまうわけには行かない。

「私が食べるのは悪夢です」

「だから食べられたら——」

「悪夢とは現実は何の影響も与えず、全く生産性のない夢全般を指します」

「……」

「これは紛れもなく悪夢です」

そう言う彼女がペンチと鋏を机の上に置いた。

「これを使つたところで貴女は自分を見つめる事なんて出来ませんよ」

「でも、私は…」

他にどうすればいいのか分からないのだ。

「そんなに言われるなら使つてみれば宜しい。私は止めはしませんよ。貴女の夢ですか」

そう言うどドレミーは静かに手元の本を開いて読み始めてしまった。

私は、机の上の処刑台が妙に気になった。

「おはようございます。朝は来ませんよ」

私が目を覚ますと一番にドレミーの声が聞こえた。椅子から落ちるように倒れた私の手元近くにはペンチと鋏が落ちていたままだった。

「さて、貴女はまだ生きてますね。それはそうでしょう。なんせ悪夢ですから」

「此処では死ねないの？」

「夢なら死ぬるんじゃないですか？でも、此処は悪夢ですから難しいでしょうね」

つまり、私はここで何度も舌を切らなければならぬのだろうか。

「貴女が此処でそれを繰り返した処で何もなりませんよ。貴女が苦しむだけです」

「私は苦しまなければならぬ」

「そうでしようか？　そもそも秘書が結婚の話を態々、貴女に切り出さなければこんな事にはならなかった。あちらにも責任があるように思えます」

「あの子は悪くない」

私の舌と私が悪いのだ。

「そうですか。なら私は止めません。どうぞ死に続けて下さい」

彼女はまた手元に視線を落とした。

「おはようございます。まだ朝は来ませんね」

もう何度目の目覚めだろうか。相変わらず外の雨は降り止んでいない。

「貴女は何時まで此処にいるの？」

「雨が止まないと帰れないもので」

「そう・・・」

そして、私は鋏を持つ。

「いい加減、貴女も感じているでしょう？」

ドレミーの言葉に私は持ち上げた腕を下ろした。

「何を？」

「『もうここまで自分を罰したならいいだろう。もう秘書の子だって許してくれる筈だ』」

「…… 思っていない」

「いいえ、思ってます。此処は貴女の夢でありながら、私の世界でも有るのです。この事など手に取るように分かりますよ」

「……」

「仮に秘書の子が貴女を恨んでいるのなら、貴女が此処で何万回死のうと許されませんよ」

「…… 分かってる」

「ええ、貴女はそれが分かってる。貴女は聡いから38回目にはもう気付いてました」
彼女は本を閉じた。

「貴女は39回目にはもう気付いていた。これは秘書への謝罪ではなく、自分を許した
いだけの自己満足である事に」

「そうかもしれない。」

「貴女は40回目にはとづくに分かっていた。この悪夢がなんの意味もないことに」

「…… そうね。分かっているわ。でも、止められない。私は弱く、不器用で何をしたらいい

のか分からない」

あの子が私を、本気で恨んでいるのかどうかなんて分からないし、あまり関係がないのだ。結局、私が私をどうしたいか次第でこの有り様は変わる。

「これは夢の専門家としての意見ですが、： 気持ちの良い夢に浸る事は誰にでもできま
すが悪夢と正面から立ち向かえる存在は極めて稀有な存在です」

「…」

「悪夢とは、向き合いたくないからこそ見てしまう物で、そんな自己を殺してまで、それに立ち向かう貴女は私が見た中ではとても強い存在です」

そう言うのと彼女は私の手からペンチと鋏を取り上げて一口に食べてしまった。

「いい加減、貴女は悪夢から覚めるべきだ。それだけ強い心が有るのなら」

目が覚めてもドレミーの声はなかった。枕元で時計が無機質な自己主張をしてくるだけ。時計を止めてベッドから降りる。いつかぶつけた足の小指は今は何の痛みも感じない。

洗面台の鏡に映るのは髪がはねていて、目の周りが赤く腫れているふてぶてしい女。女は自嘲する様な笑いを見せた後、少しだけこちらに舌を見せた。

○

お久し振りです。ええ、また美味しそうな香りがしてきたのでフラリと立ち寄った次第です。最近、貴女の記事は詰まらない物ばかりで。

ああ、いや。別に、文句を言いたいわけじゃないですよ。私だって貴女の記事ばかり読んでいるわけじゃないですからね。ひもじい何てことは全くありません。寧ろ、供給過剰ですよ。

太らないように注意しなきゃいけませんねえ。

え？じゃあ、食べなくていいじゃないかって？やだなあ、それとこれとは別ですよ。上手いものは別腹ってやつです。

さてさて、ではそろそろ頂きましょうか。今回の夢はどんな味でしょうか、楽しみでなりません。

キヌメパニツク！

釣瓶落としては、日本の様々な場所で語り継がれる妖怪で、特に近畿地方、京都周辺にその話が多い。釣瓶火と同一視されたり、釣瓶おろしと呼ばれることもあるそう。

釣瓶落としては大木の梢に住み着き、下を人が通り掛かると突然落ちてきて、人を驚かしたり、食べてしまう恐ろしい妖怪である。その見た目は人の生首であるとか、そのまま釣瓶であるとか、火の玉であるとか、様々な言い伝えが残っている。

「あ、あ、っ！うんっ！！あーあー」

でも案外、言い伝えとはいいい加減なもので。人間二十もいれば伝える内容が変わっていく様に伝承もまた、良いように改変された内容である事は少なくないのだろう。

「あーあー、うん。よしっ！スウー…」

でなければ、この小さくて可愛らしい少女があのだ釣瓶落としなんて信じられない。ツインテールをフワフワ揺らして小さく桶に座り込む、少し大き目の白い着物を着た彼女はどこからどう見てもただのお子様には見ええない。

「おらあつ！首い寄越せええええええつ！」

「喧しいっ！！」

その手の物騒な鎌と言動さえ無ければの話であるが。

○

「あつはは！何、それであんた一発ボコられて帰ってきたの？」

「……」

今、先程博麗の巫女に頭を叩かれて、たん瘤作つた私を大声で笑っているのは黒谷ヤマメ。地上からここへ続く大穴の入口に巣を張つてる土蜘蛛だ。私は本来、木の上とかで人を待つのだが大穴にはそんな木生ものえていない。そこで、仕方なくヤマメの巣に便乗している。そのせいでヤマメとは長い付き合いだし、そこそこ仲がいい。

「人里の方へ行けばいいのに。ああ、いや彼処は手出しちや駄目なんだっけか」

「私だってあれが霊夢だって知ってたら手なんか出さなかつたもん」

最近何も落ちてこないせいで私も暇してたのだ。というわけで大穴から出てフラフラしていたら、お誂えむきな木の下の方で水を汲んでいる黒髪の女がいた。しめしめと思ひ、静かに喉を整えた後、襲いかかったまでは良かったのだが、その女が振り向くとやけに見覚えのある顔だった。と言うか霊夢だった。げえ、と思つた時にはもう遅い。私は思いつきり頭を叩かれて大穴送りである。

巫女超怖い。

「はああく。ついてないなあ」

「くつくつく」

「何笑ってんのさ」

「他人の不幸は蜜の味。友人の不幸はそりやもう絶品さ」

こいつ性格悪いな。でも、明るくてサバサバしてるから憎めない。私と違ってヤマメには友達が沢山いる。

「でもまあ、愚痴に付き合っっちゃってんだからいいでしょ？地底のアイドル、ヤマメちゃんがお酌してくれるなんて中々ないよ」

「それを自分で言っちゃう所がなあ」

確かに私の数少ない友人の一人。こうして自棄酒に付き合ってくれているだけでありがたいはありがたい。でも素直に認めるのは癪だから言っちゃらない。友人の不幸を肴に大喜びするような奴は友人に泣かされるといふ事を思い知らせる。

○

「ちよつと、ヤマメ。まだ話は終わってないらよ」

「えええー。もういいよお、私疲れたあ」

地底の居酒屋に座り込む二人の女。酒瓶持って呂律の回っていないキスメは隣で嫌

そうに顔を擧めるヤマメの肩を無理矢理、押さえ込んでいる。

「らからあつ、わらひが思うにいつ地上の人間どもはあ」

「ああつもう、それさつきも聞いたつてえ」

ヤマメが酔つ払いの処理を初めて、かれこれ四時間。一向に処理は終わりそうにな
い。いつそ、さつきと爆発してもらつた方が楽だなとヤマメは思い始めていた。

「いいからつ聞きなさいっ!」

「痛い!」

哀れ、ビンタを食らうヤマメ。他人の不幸を煽る者はこうなるのである。

「はあ。分かつたよ。こうなつたらとことん付き合つてやるよ」

「それでこそヤマメらっ!」

楽しそうに拍手するキスマ。酔い潰れるのを待つが早いか、ヤマメの目からハイライ
トが消えるのが早いかと言つたところか。

「んで、人間が何だつて?」

「そうつ人間はねええええええ..」

ふんすす意気込んだキスマの元気な言葉は尻すぼみに消えていった。

「何、どしたの?」

「えへへっトイレえ」

「自由すぎるわ！ああっもうほら、早く行つといで」

「はいっ！行くでありますっ！ヤマメ教官」

ユラユラと上機嫌に敬礼するキスメ。酔っ払いは何処までも楽しそうである。絡まれる方はうんざりした顔で手をヒラつかせているが。

「よっこい… あれえ？えへへ、おかしいな。ほれっ… うん？どっこい、ふんっ！」

「あんた一人で何してんの？」

「… いやあ、ちよつと待つてねえ。ほいっ！あれ、えへへ…」

笑つてゐるはずのキスメの目に徐々に涙が溜まつてきた。

「？」

「… ね、ねえヤマメ」

妙にしつかりとした口調に戻つたキスメはギギギと錆び付いたロボの様に首をヤマメの方へと向けて弱々しく呟いた。

「どうしよう。体が抜けない」

どうやらハイライトが消えたのはキスメの方だったらしい。

○

「はあ？」

「いや、抜けないの」

「意味がわかんない」

何で分らないし。

「いや、だからさ。体がギッチリ嵌ってるせいで動かないの」

割とマジで動かない。気付いたら足先の感覚が無いとか全然笑えない。酔いだって

冷めるわ。

「もうさ、帰っていい？」

「!?」

言うに事欠いて帰るとか言い出した。それが困っている友人に対する態度かコノヤロー。

「私は野郎じゃないし、ウザ絡みされてた上にわけわかんない事に巻き込まれたくないんだよね」

「ちよ、ちよつと待って。マジでこれヤバイ奴だからっ」

「じゃ！頑張れ！」

そう言つてヤマメは席を立ち、出口の方へと進んでいく。ここでヤマメに置いていかれると拙い。何が拙いつて主に私のトイレ事情が拙い。

「待つて待つて！わ、分かつた謝るからっゴメンつて！だから御願いますつわだじを

だずげでえええええつ!!」

「あああつ五月蠅いっ!分かった、分かったから泣かないで一旦黙りなっ!!」

取り残される不安感に泣くとヤマメは戻ってきて私の涙と鼻水で汚い顔を拭つてくれた。

「私も疲れてんだから、さっさと解決して帰るよ」

「有り難うございますっ!ヤマメ愛してるっ!!」

「分かったから、まとわりつくな!」

やっぱり持つべきは親友だな。当の親友は嫌そうな顔しているけれども。

「さて、じゃあ抜くよ」

「う、うん」

ヤマメが胡座をかいて私の桶を固定。私が万歳して持ち上げてもらう形である。

「せーのっ」

「ふんっ!」

「あああああああつ痛い痛い痛いっ!!ちよつとタンマタンマ!」

これダメな奴だ。すんごい痛い。もうなんかこの世ならざる痛みを感じる。

「ちよつとくらい我慢我慢」

「痛い痛いっあかんあかんあかんっあかああああん!」

「じゃあどうするのさ」

「ど、どうしましょうかね…。」

息もたえだえである。

「因みに、後どれくらいならトイレ我慢できる?」

「分かんないけど…そんなに長くなさそう」

私の尊厳的な意味で残されたタイムリミットはそう長くない。私の膀胱がそう語っている。

「うーん。じゃあ、こうしようか」

「?」

「で、なんで私の所に来るわけ?」

「別の感情に気を取られてる間に無理矢理引っこ抜こう大作戦」

ヤマメの笑顔に頭を抑えるパルスィ。ヤマメが言うには嫉妬心を使って痛みを無視させようという事らしい。

いやあ、やっぱり持つべきは賢い友人かも知れない。私は相談相手を誤ったのだ。

「下らない。ほらさっさとやるわよ」

何だかんだ言つて手伝つてくれるらしい。お優しいものだ。

「おおっ、なんかゾクゾクする!」

私の体に緑色のオーラみたいなのが立ち上っている。何となくモヤモヤとした感情が喉元まで登ってきているのがわかる。これが嫉妬心なのだろうか。

「よし、じゃあせーので抜くよ」

「「せーのっ」」

「あああああああんんんっ!痛い痛いっ!妬ましいし痛いっ!何コレ何コレ!?!新感覚だよ?!とにかくいたああいつ!!」

もの見事に頓挫。いや、まあ予想はしてたけども。痛い上に無性に羨ましくて妬ましくて、これは精神衛生上、全く良くないことだけが分かった。

「どうするのよこれ」

「そろそろ飽きた」

「うおいつー!」

今回の事で分かった。友達なんて無意味だ。

「キスメ、トイレはどう?」

「も、もう…キツイ…」

そう、私はもう一步で悟りへ至る。いや、地霊殿のあれではなく。

最早、私の頭上からは小便小僧っぽい天使が三匹程、爆笑しながら私を指差しながら降りてきているのだ。

「ヤ、ヤマメ…最後にひ、一言」

「死ぬわけじゃあるまいし、大げさな」

「私が死んでも悲しまないで…」

「いや、悲しまないって。逆にこれで死んだら笑ってやるから安心しな」

ああ、神様。妖怪にも天国はあるのでしょうか。お母様、こんな詰まらない事で先立つ不幸をお許し下さい。お母様なんていないけど。

「おお、パルスィに…ヤマメとキスメ?何してんだ?」

「キスメが桶から抜け出せないんだって」

「へえ」

私の死体はどうして貰おう。ああ、そうだ。消毒も兼ねて地霊殿で焼いて貰おう。

ちつちやいから燃料にもならないけれどまあいいだろう。

「外に出られればいいのか？」

「ええ」

「何だ簡単じゃないか」

私が天へ祈りを捧げていると傍らに大きな影が立った。

「ちよいと失礼」

「えっ、何何、何するの」

勇儀は桶ごと私を横に倒して、左手で桶を固定した。

「ふんっ」

「おおっ!」

無造作に振り下ろされた勇儀の鉄拳が桶を粉砕。

「あっ?や、やったああああっトイレえええええ!!」

晴れて私は自由の身となった。殴られると思つて身構えた時にちよつと漏れたのは内緒。

今回、私が得た教訓は「持つべきは力」という事だ。少なくとも友人のピンチを笑う様な友人はいらない。

○ 「お前ら何してたんだ？」

後方で手を打つヤマメとパールスイに勇儀が振り向いた。

「いや、その発想はなかった」

「ええ、全く」

ニヤニヤと笑う二人。本当に桶の破壊を考えていなかったかどうかは二人にしか分からない事である。

「程々にしてやれよ、全く」

一本角の鬼が溜息を吐いたのはいつぶりの事であつたらうか。

○ 「じゃーんっ！」

「あんたも懲りないね。それ何？」

「段ボールって言うんだよっ！これならいざと言う時にも自分で破って出られる、画期的な私の部屋！」

こうして暫くの間、地上と地底を結ぶ大穴には橙文字でミカンと書かれた段ボールに座り込む少女の妖怪が現れるようになったという。

雨の日の翌日、グズグズに壊れた段ボールを引き摺っている少女の姿を見た土蜘蛛はそれを豪快に笑いとばしたのだった。

リードの先には

私は火焰猫燐。ここ地霊殿にて怨霊の管理をさとり様から任されているしが無い火車である。最近はお空が中々働かなかつたり、さとり様が病気になったりと私の仕事が増えている気がするが構うもんか。主が弱っている時に助けられないペットなんかいないというものだ。

それで私が今何をしているか。それはズバリ、さとり様のお料理作りである。さつきにもちらつと言った通り、さとり様が病気にかかって、今は満足に動けないし喋れない日々が続いている。喋れないけれどあたいにはさとり様が何を欲していて何をしたいか手に取るようにわかる。主の心くらいなら覚妖怪じゃなくても読めるというものだ。

「さとり様、入りますね」

中からさとり様の返事はない。そりやそうだ。

玉子雑炊の乗ったお盆片手にドアを開けるとむわつと籠もりきつた匂いが鼻に付いた。

「ご、ごめんなさいさとり様つ、今換気しますね！」

地霊殿では灼熱地獄が近くにあるせいで温度が地上よりも高い。そんな中で窓を閉じて密閉された空間の中に長時間いれば汗もかくし、その匂いも籠るといふものだ。あたいとした事が窓を開けるのをすっかり忘れてしまっていた。

「……」

ちらりとさとり様を見ると苦しげに眉をひそめていた。

「ごめんなさい、本当にすいません」

しよぼくれて謝るとさとり様が少し微笑んでくれた。あたいにはその表情だけで「気にしないで」と言ってくれていることが分かった。こんな時、普段のさとり様ならあたいの頭を撫でてくれるのだが今その手は動かせない。何となく感じたやり場のない不快感にまごついていると、さとり様の視線が私から机の上の雑炊に視線が移った。

「ああっそう言えば、雑炊を作ってきたんです！今食べられそうですか？」

私が聞くとさとり様はほんの小さく頷いた。

さとり様の食べるスピードに合わせてスプーンを口元まで運ぶ。そして、ちよつとずつ食べていくのだ。この時に私は最近あった事をさとり様に伝えていく。やはり寝たきりだと退屈するだろうし、何の変化もない生活というのもつらいだろうと言う事だ。

「地上では博麗の巫女が代替わりをしたそうですよ」

さとり様が相槌を打つことはないが、私の話を聞いて僅かに表情を変えていく。それが嬉しくて、ついつい話し込んでしまう事も少なくない。

「それで、最近はお姉さんが何だかいちやもんを付けてくるんで——」

今日もつい話し込んでしまい、ちよつとした愚痴を零した時の事、地霊殿の呼び鈴が喧しく館内に響いた。

「ああ、また来た」

樽をすればなんとやら。今日もまた鬼のお姉さんが来たらしい。やれやれ、あたいはそんな暇じゃないんだから勘弁して欲しい。

とはいえ、来てしまったものは仕方ない。

「すいません。少し離れますね」

さとり様に一言入れて、さとり様が小さく笑った事を確認してからあたいは部屋を出た。

○

「また彼処に行ってきたの？」

「ああそうさ」

地霊殿から戻って一人酒を煽っていると、パルスイがやってきて隣に座った。

「鬼だつて怪我するのね」

「当たり前だろ。私だつて不死身じゃあないんだ」

おかしな奴だ。何時も私から誘つてもものつてこない癖して、声をかけていない時には自分から寄つてくる。猫みたいだな、パルスイは。

「ううん、違うわ。そうじゃなくて鬼を傷つけられるのね、彼女」

「… 怨霊を操られるとな。ちよいと厄介なのさ」

「成程ね」

怨霊は精神を犯す。肉体よりも精神に比重がある妖怪にとつて怨霊はそれなりに脅威なのだ。

「彼女の様子はどうだった？」

「どうもこうもないよ。相変わらず狂つてる」

「…」

「いや、違うな。狂おうとしてるって感じた」

そうだ。あいつはおかしくなろうとしている。あいつも頭では理解してるんだ。

「成程、だから勇儀も彼女に構うのね」

「こちらを覗き込む緑の双眸。その目はお前のことなら何でもお見通しだと言うように怪しく煌めいている。」

「：それだけじゃないんだけどな」

今までは私が地霊殿に行っただけで追い返されてしまっているが、何時までもこんな事をしていられない。あいつの為とかそんな事じゃなく、私の知り合いが嘘に塗れているという事が気に食わないんだ。鬼らしく、自分勝手に行かせてもらおう。それに、さとりとの約束もある。

「応援してるわ」

樂しげにグラスを揺らすパルスィ。グラスの中で踊る氷に目を奪われながらの片手間に言われた応援メッセージにはなんの感情もこもっていないかった。

「冷たいな。加勢には来てくれないのか？」

「冗談はやめて。私が加勢に入った所で何の力にもなりやしないわ」

一度グラスを傾けてからそう捲し立てた。まあ、加勢に来て欲しいとも思っちゃいないがもう少し手心があってもいいんじゃないかとは思う。

「私が出るのは此処で誰かさんの話を聞いてあげるだけよ」

「私が誘ってもノってくれない奴がなにを言うか」

「馬鹿ね。たまにこうして構ってあげるからいいんじゃない。希少価値ってやつよ」

「そうかい」

長年つき合っているがよく分からん。まあ、確かにこうして話すと確かに何だか得し

た様な気になる。

「有難う。助かるよ、パルスイ」

「ば、馬鹿ね。お礼なんていいのよ。早くあの子のそこへ行つてらっしやいな」

正面から礼を告げてみるとパルスイは頬を少し染めて顔を背けた。相変わらず他人の感情を正面から受けるのが苦手なように可愛い奴だ。

私は「妬ましい妬ましい」とブチブチ呟いているパルスイと別れて、また地霊殿へ足を向けた。

○

全く鬼のお姉さんにも困つたものだ。ほつといておくれと、いつもいつもいつもいつも言つても聞いちゃくれない。ここはさとり様の家だ。鬼のお姉さんに兎角言われる筋合いはないというもの。

少し乱れた服の裾を正して部屋へ戻ると、さとり様は眠つてしまつていた。折角作つた雑炊はもう冷えて乾いてきてしまつている。

わざわざ起こすことも無いか。

「…」

雑炊は捨てようかと皿を傾けると、後ろからもたれ掛るようにして腕が伸びてきた。

驚き振り返れば、こいし様が「私に頂戴」とでも言う様に皿へ視線を向けている。

「新しいのを作りますよ」

私がそう言うところいし様はイヤイヤと首を横に振った。

「仕方ないですね」

私は乾いた雑炊の表面にスプーンを突き立てる。僅かな抵抗を無視して雑炊の中へ沈んでいくスプーン。こいし様は食べ物零してしまうから私の背中に乗るこいし様の口元までスプーンを運ぶ。口に入れるところいし様はニツコリと笑った。

ビー

「.:」

どうやら眠ってしまったっていらしい。地霊殿の呼び鈴の音に目を覚ます。未だ眠気の霧がかかった頭を振って時計を見ると夜の7時。地底では昼とか夜とかあまり関係無いが生活リズムの基準として考えている。妖怪でこんな事を考えているのはきつと私たち地霊殿にいる妖怪だけだろう。さとり様の生活リズムにあたい達が合わしたただけだ。きつとさとり様がいなくなつたとしても体に定着したこれは中々落ちない事だ

ろう。

いや、今はそんな事より来客だ。今日はもう鬼のお姉さんは来たから誰だろうか。

「よう」

「…」

最悪じゃないか。少しウキウキして扉を開けてみれば見慣れた一本角がそびえ立っていた。

「何か用？」

意図せず語が荒くなってしまふ。鬼のお姉さんが何を言いに来たかは分かってるから。

「いやね。いい加減目を覚まさないかと」

ほらきた。

「だから、何時も言ってるけど何の話さ」

「知らばつくれるなよ。わかってる癖に」

「分からないからこうして聞き返しているんだよ」

何時も何時も同じやり取りをしている気がする。いい加減、鬼のお姉さんも飽きないのだろうか。

「違うね。お燐お前はよく分かつてる。分かっちゃいるが認められないのさ」
どこか遠まわしな物言いに腹が立つてくる。あたいは暇じゃないんだ。鬼のように
気ままに暮らすことなんて出来ない。

なんせさとり様のペットなんだから。

「…知らないけどもう行っていいかい？さとり様の様子を——」

「それだよ」

あたいがかぶりを振って館内に戻ろうとすると鬼が扉を掴んで言った。

「は？」

「お前は何時も二言目にはさとり様って言うよな」

当たり前だろ。

私はさとり様のペットなんだから。

「当たり前だろって顔してるな。それくらい覚妖怪でなくてもわかる」

「五月蠅いな。冷やかしなら帰っておくれ」

「いんや、今日は帰らない。帰ってやるもんか」

いつになく強情だな。

面倒極まりない。

殺してしまおうか。

「……分かったよ。そこまで言うなら誤魔化さずに、もつとハッキリ言っておくれ」

あたいが鬼の方へ向き直ると鬼は扉に掛けていた手を離した。

「じゃあハッキリ言つてやろう。お前の言うさとり様なんて何処にいるんだ？」

「は？」

こいつは一体何を言い出すんだろうか。何処にも糞も地霊殿に決まつてるじゃないか。

此処がさとり様のいる場所なんだから。

「ああ、言い方が悪かったな。お前がお世話してるさとり様やらこいし様は今何処にいるんだ？」

「お姉さん、おかしな事ばかり聞くんだね。さとり様は此処で暮らしているし、こいし様だつて此処に帰ってくる。さつきだつて此処にいたよ」

「へえ。ならお前がいつもしているお世話は一切どんな仕事なんだ？」

ズカズカと他人のプライベートにまで入り込んでくる。これだから鬼という種族は

嫌いなんだ。

「…今日はさとり様の部屋を換気して、使った雑炊をさとり様に食べてもらったよ」

こんな事聞いてどうするんだか。

「成程、そういう設定なのか」

「は？」

「いやな、お前が慕っていたさとりはもういないぞ」

「あ？」

「随分前に寿命で死んだよ。あの時に一番悲しんでいたのは他でもないお前だったじゃないか」

コイツが一体何を言っているのかさっぱり分からない。

「死んだ？馬鹿言っちゃいけないよ、お姉さん。さとり様は今病気で動けないし喋れないけど、私に微笑んでくれる！私の作った料理を食べてくれるっ!!死んでなんかいないっ！」

あたいから沸き立つ怨霊たちの軍勢が鬼の肌を傷をつけ始めた。それを気にした様子も無く鬼は続ける。

「違う。それはお前さんが作った幻だ。さとりだってこいしだって死んだんだ。目を覚ませ」

「生きてるって言ってるんだろがっ!!!」

あたいが声を上げる度、怨霊達は死体を引き摺る様な声を上げて鬼を攻撃する。

「じゃあ見せてやるよ」

鬼はそう言うのと地面を強く蹴った。その衝撃だけで怨霊たちは弾かれ、鬼は館内に立ち入ろうとする。

「おいっ！勝手に入ってるじゃねえぞっ!!!」

あたいが繰り出した爪は鬼の肩を抉り、フロントの床に赤い花を咲かした。

「丁度いい。一緒に連れて行ってやる」

そう言つて鬼は私の手首を固く握つて、引き摺るようにして館の奥へ進んでいく。鬼が一步進んでいく度に私の視界に入っていた白靄は晴れていった。ドンドン地霊殿の中の様子が脳みその中に入ってくる。見慣れている筈の景色が形を変えていく。

破れたカーテン。

朽ち果てた木製扉。

動物達の腐った死体。

灯りの消えた天井。

罅の入った通路壁。

頭が痛い。深い眠りから無理やり引きずり出される様だ。

「おら、っっっだ」

鬼が私を連れて辿りついたのは凄まじい死臭を放つ扉の前。

「だ、駄目だよっ!!鬼のお姉さん、頼むからよしとくれよっ!」

此処だけは醒めちやいけなない。

此処だけはあたいの世界なんだ。

腕を掴まれてる鬼の手首を切り落として、扉の前に立ち塞がる。

「もうっ… もういいだろっ!」

「良くない」

「本当に駄目なんだ。あたいは、まだ夢に浸っていたんだ… だから」

「どけ」

「お願い…」

「どけ」

「お願いします… この通りです…」

精一杯頭を下げる。あたいには何もできないんだ。

「どけ」

「…」

「…」

「…」

「!!!」

どうしてもこの扉を開けるって言うなら殺してやる。相手が鬼だろうと知ったことか。

鬼の首元狙って突き出された右腕。顔見知りだろうが関係ない。完璧に殺すつもりだった。

だけどその手が鬼の肌に触れることは無かった。

「うっ！」

気付けばあたいの体は宙に浮き、扉を突き破って部屋に叩き込まれていた。

「これが現実だよ」

妙に優しく語られたその言葉にあたりは顔を上げることが出来ない。上げてしまえばあたいがあたりでなくなってしまうから。

「ちゃんと見な」

蹴られた腹が痛むあたりを鬼は無理やり持ち上げて、顎を掴まえてベッドの方へ向かせた。

「っ！」

「見えたか？」

あたいの視線の先にはボロボロのベッドの上に寝そべるよく分からない人型の何か。肉がドロドロに腐敗していて、元が何か分かったものではない。その顔と思われる場所

の下部には乾いた米がへばりついていた。

無造作に床に置かれた皿の近くにもう一つの肉の塊。こちらは体に革製のベルトが巻き付けてあり、まるでランドセルの様にも見えた。

それはどうしようもなく。

本当にどうしようもなく、唯の死体だった。

○

「分かったか。死んでるんだよ」

五月蠅い。

そんな事ずっと分かった。

分かってない筈ないじゃないか。

あたいはさとり様のペットだぞ。

「何時までこんな馬鹿なこと続けるつもりだ？」

馬鹿なこと？

「馬鹿なこと？」

「ああ、馬鹿な事だ。何時までも死者に引き摺られ、自分に嘘をつき続けるお前は大馬鹿だ」

こいつは何も分かってない。

「… お前は何も分かってない」

「今のお前よりは分かつてるつもりさ」

分かってない。

「あたいは… あたいはさとり様がいないと駄目なんだっ！さとり様が死んじゃって、こいし様もいなくなっちゃたなら私は何者なんだいっ!!」

「お前は火車。お前は火焰猫燐だ。それ以外何者でもなくなつたんだよ、遠い昔に。」

やっぱり何も分かってない。

「違うっ!!私、私はっ!さとり様のペットの妖怪だっ!さとり様のペットの火車だっ!さとり様のペットの火焰猫燐だっ!!さとり様あつてのあたいなんだよっ!主がいなペットなんて… そんなの… そんなの要らない…!」

あたいが、「お燐」になつたのはさとり様に名前を頂いた時からだ。

あたいが、「お燐」でいられるのはさとり様がいる時だけだ。

「お燐」はさとり様がいなきや、生きていられないんだ。

「主を貶めるのはペットの役目なのか?」

「貶めてなんか…」

「死んでからも、お前のままごとにつき合わされるんだぞ」

「う、うるさいうるさい五月蠅いっ！大体、なんでお姉さんが口出ししてくるんだいっ！放つておいておくれよっ！」

「これはあたいと、さとり様の問題なんだ。」

「こいつは部外者なんだ。」

「それはな、私の友人が狂ってることに私が耐えられないってのが一つ」

「そんな理由で——」

「それで、さとりにお前さんを任されたのがもう一つだ」

「っえ？」

「お空やこいしが死んだ時のお前の乱れ様を見たさとりが私に頼み込んで来たんだよ。」

『どうか私が死んだ時は… 面倒を見てくれとまでは言わないが、気にかけてやって欲しい』ってな」

嘘だ。

「言っておくが私は嘘なんてつまらんことは言わん」

「じゃあ、どうして…」

あたいにはその先の言葉が分からない。ただ口から零れた音の意味を自分で理解出

来ない。

「そんなの……あたいはどうすれば……」

「ペットを辞めればいいのか」

「そんなの出来ない、出来ないんだよ。あたいはそれが全てなんだ」

それきり部屋は静まった。ボロボロの壁に旧地獄を舐め上げる風が吹いて少しだけ音を立て、朽ち果てた窓枠が薄らと緑色に光った。

「……なあ、お隣」

「なんだい……鬼のお姉さん」

「私は嫌いか？」

「ああ……大ッ嫌いさ」

口に出すとゾクゾクと胸の内からお姉さんへの恨み辛みがダムが決壊するが如く、溢れかえってきた。

「大ッ嫌いだよ。あたいはお姉さんが妬ましいんだ。主がいなくなつて生きていけるその力強さが妬ましいっ！自己を持っているその凶太さも妬ましいっ！その傲慢さ、その優しささえ、全てが妬ましいんだっ！何よりっ！さとりに様に信頼されているという事実がどうしようもなく、妬ましいっ!!!あんなにか大ッ嫌いさっ!!!」

吐いた。

こみ上げてくる思いをお姉さんにぶちまけた。

そんなあたいを前にしてもお姉さんの視線は揺るがない。

「私の事が嫌いなお隣はさとりのペットのお隣じゃない。間違いなく抜き見のお前自身だ」

「…何が言いたいんだい？」

「その首輪の持ち手はとつくに手を離してるんだよ。あとはお前がそれを外すだけさ。そして、お前にはそれをするだけの自己がある」

「…分からない。何もわからない。ねえ、お姉さん。ペットを辞めたなら、あたいは一体どうすればいいのかな…」

「それはお前が決める事だよ」

あたいは一人だ。

さとり様…寂しいよ。

「ただ一つ言っておくと、お前が私の事を嫌っていようと私はお前の事が結構好きだぞ」
鬼のお姉さんはそう言うのと床に落ちた手首を拾って部屋を出ていった。

「……なんだい、それ」

なぜだか分からないけれど笑いが込み上げてくる。

「本当に気持ちいい程の妖怪だね、お姉さんは」

笑いの後には涙が零れた。

○

「お疲れ様」

私を手首を無理やり引つ付けているとパルスィがやって来て、隣に座った。

「加勢はしないって言つてなかつたか？」

「さあね。どうだったかしら」

「・・・そうかい」

今夜は珍しくパルスィから酒を持ってきた様だ。久し振りに二人で呑むとしよう。

陽の光が届かない筈の旧地獄。

酒盛りの声や怒号、笑い声など、その名前からは想像出来ない程の賑わいを見せる猥とした表通り。そこを真っ直ぐ進んでいくと次第に光量は小さくなり、騒ぎ声の数も減つていく。やがて、喧騒が遠くに聞こえるようになる程進むと、何も無い更地が眼前に広がる。そこはかつて、地霊殿という館があつた場所で、そこに住む妖怪達がいなく

なつた後に取り壊された。

そんな地霊殿跡地のちようど真ん中に一つの石碑が鎮座している。彫られている筈の名前は既に風化していて読むことはできない。墓前に供えられている物など何もなく、墓と言うには余りに侘しい物であつた。

誰が立ち寄るわけでもなく、何処からともなく乾いた風が吹くと、墓石に括られた真新しい首輪が静かに揺らめいた。

幽々子様は死んでみたいっ！

ここは白玉楼。死んだ魂たちが閻魔の裁きを受けるまでの間に順番待ちをする場所であり、西行寺幽々子様がその統括をしている。統括とはいえど、やっている事はふらりとその辺りを歩いてみたり、宙を漂う魂にちよつかいをかけているだけであるが。

そんな自由な幽々子様が唐突に何かを始めたいと言う時も少なくない。例えば最近で言うと、幻想郷に神霊が大量発生した異変の際、異変の首謀者がそうであった為かどうかは分からないが、仙人になりたいと言った時があった。色々準備した割に、即効で飽きて片付けさせられたからよく覚えている。

そして、そんな風に何かをしてみたいと幽々子様が言う時には異変とも言える兆候が見られるのだ。

「幽々子様、もう召し上がりませんですか？」

「……ええ」

これである。現在、幽々子様がおかわりした茶碗の数は五。普段ならこの三倍は掻き込む幽々子様が五杯で満足するなど考えられないのだ。いや、五杯でも多いとは思っけども。

ともかく、幽々子様がこうやって少食になったらそれは兆候なのだ。

「ねえ、妖夢」

ほらきた。

「私、死んでみたいわ」

「はい？」

今回ばかりは意味が分からなかった。

「どういう意味ですか？」

「死んでみたいのよ」

この人には噛み砕いて説明する気は無いのだろうか。何時も幽々子様の言うことは婉曲的で良く分からないのだ。そうして何時も半人前だと言われてしまう。

「すみません。私にも分かるようにお願いします」

「いやだわ、そんな事だから妖夢は半人前なのよ」

私はそろそろ泣いてもいいと思う。

「ええとね、私は今、死んでるでしょ？」

「ええ」

「で、死ぬ前の記憶がないの」

「らしいですね」

「だから死んだ時のことも覚えてなくて」

「はあ」

幽々子様は伝えることは言い切ったとでも言うように私に期待の眼差しを送っている。

「え、終わりですか？」

「鈍いわねえ。だからあ、誰しも一度は体験する筈のお葬式を私は経験してないのよっ！」

プンプンと擬音語を背中に背負うのは我が主ながら可愛らしい限りではあるが、言っている内容は全く可愛らしくない。どころか、どことなく狂気を感じないことも無い。

端的に言うという意味不明である。

「普通の人間の場合、経験も糞もないと思うんですが。死んだら終わりですし」

「そんな事知らないわ。重要なのは私のお葬式をしてもらった経験がないという事なのよ。折角死んでるのにこれじゃ一つ損してる気分だわ」

「よく分かりませんが、分かりました。じゃあ、幽々子様のお葬式をすればいいんですね？」

「ええそうよ」

面倒臭いが仕方ない。こうなった幽々子様は自分が飽きるまで止まらない。いやあ、非常にタチが悪い。

一体、幽々子様は何故こんな事を思いついたのだろうか。私はふと幽々子様がご飯を食べる前に読んでいた本を拾い上げてみた。

幻想郷には外から度々、物が結界を超えてやって来る。勿論、雑誌や文庫本なんかも。幽々子様は暇を紛らわす為と言って、そういった本を読むことが多いのだが、今回はそれが原因になったらしい。

雑誌の表紙にはでかかど『終活』の文字が書いてある。開いてみると、終活とは人生の終わりを迎えるための活動という事で、人生を終えるためにするべき作業を統括した意味であるらしい。その中に自分のお葬式を自分で決めて予約するという事もあった。

記事には老人の男性が笑顔で自分の遺影を手を持っていたり、笑顔で棺桶に入ったりと何とも楽しそうな終活の内容が書かれていた。おかしな文化だと思いはしたが、まさか葬式をやってみたいと言いつ出すとは……。

幽々子様に見せる本には検閲が必要なかもしれない。

○ 「号外ですよ！号外！」

忙しく動く人混みの中、背中の羽を仕舞い込んだ烏天狗の声がよく通る。号外なので無料である筈なのに人間は誰も取ろうとしない。それだけ烏天狗という種族が作る新聞に信憑性がないということだろう。

「白玉楼の主、西行寺幽々子さんが亡くなりましたーっ！号外ですよっ!!」
その内容が内容なら尚更な事である。

「聞いてくださいよ霊夢さんっ！ 誰もこれ取ろうとしてくれないんですよっ！」
「それで、なんで此処に来るのよ…:」

人里と打って変わって、閑散とした博麗神社。此処にいるのは紅白巫女に白黒の泥棒だけである。

「はいっこれどうぞ。号外です」

「いや、私もいらないわよ」

「まあ落ち着け、霊夢。私が読むから心配しないでいいぜ」

「ちゃんと持ち帰りなさいよ」

「それは知らないな。私はここに置いてある新聞を読むだけだぜ」

にししと笑う魔理沙に霊夢は睨む目を強めるが、溜息と同時に視線を新聞の上に落とす。

「いらないんじゃないのか？」

「私の家にあるなら読まないと損でしょうが」

「くつく、そうだな。どれどれ」

「おい、バカラス。記事間違ってるぞ」

「射命丸です。そして記事は間違ってます」

「幽々子は元々死んでるだろうが」

「それが私もそう思ったんですが、妖夢さんがそう言うので…」

一面に書かれた西行寺幽々子死去の文字。その隣にはでかかど笑顔の幽々子の写真が写されている。元気にこちらへピースしている。

「もうちよつと写真あつたんじゃない？」

「幽々子さんがどうしてもこれがいいと仰って…」

「良くわからないわね」

そう言うのと霊夢はお茶を飲み干して、ゆっくり立ち上がった。

「ん？霊夢、どこへ行くんだ？」

「白玉楼。何か企んでるなら未然に防がないとね」

「奇遇だな。私もちようど行こうと思つたところだ」

人間がコンビニ感覚で冥界に行けるといふのだから恐ろしいものだ。この二人に關していえば妖怪に近いのかもしれない。

「さて、私ももうちよつと配つてきますかね」

どこか諦めた雰囲気の見える声色で呟く新聞記者は直ぐに人里へ飛び立った。

○

「何だこりゃ」

魔理沙がそう呟くのも無理はないだろう。冥界に入って飛び込んできたのは無数の魂。それは何時もの事であるが、その一つ一つが黒い喪服を着用しているのだ。はつきりいつて気味が悪い。

「いよいよ怪しいわね」

私達が白玉楼門前まで来ると、中からドタドタと音が近付いてきた。その音は向こう側で止まり、門を開けた。

「ああ、霊夢さんたちでしたか……早かったですね」

出てきたのはそこいらの魂と同じ様に喪服に着替えた庭師の妖夢。今日は自慢のな
んたら剣も持っていないらしい。

「気になったから様子を見に来たのよ」

「暇だったから茶々入れに来たぜ」

「そうですか? 幽々子様も喜ぶと思います」

私はともかく、茶々入れに来られて喜ぶのもどうなんだ。

私たちは中へ通された。

「この度は態々、幽々子様のために——」

「いやいやいや、待ちなさい。私たちは別に幽々子が死んだと思って来たわけじゃない
わよ」

「え?」

キョトンとした顔を見せてくれるが、私の感覚はごく一般的なものじゃないだろう
か。

「だからね、私はあんたらがまた妙な事をしてると思って、調査しに来たのよ」

「なるほど? つまり、幽々子様が死んだという事は信じていらっしやらない?」

「当たり前よ」

「いいでしょう。ではこちらに」

妖夢が後ろの麩を開けると、そこには小さな祭壇と木製の棺桶が置かれていた。

「顔を見ていつて下さい」

妖夢が開けた覗き窓に目をやる。

「どうです？綺麗な顔してるでしょう…死んでるんですよ…」

「…」

「おお、こりやまた…」

綺麗な顔してるってか笑ってる。

めっちゃこつちにウイソクしてきてる。

「まるで生きてるみたいだぜ」

「いや、生きてるでしょ。死んでるけど」

茶番過ぎる…。

魔理沙も何故か妙に乗り気だし、意味がわからない。

「幽々子様は今朝亡くなりました。突然の事でした…。何時ものようにご飯を十五杯

召し上がられた時に…。くっ…。喉を詰まらせて…。ウフ…。き、きつとお年だつ

たのでしよう」

いや、笑ってんじゃん。

「そうか…。そんな間抜けな死に方だったのか…。でも、なんて言うか幽々子らしい最

後だな」

「くつくく…」

何真剣な顔でそれっぽいこと言ってるんだか。

「下らない。私は帰るわよ」

私が立ち上がると妖夢が私の裾をひっ掴む。

「お待ち下さいっ！これから様々な人妖が集まって、それから葬式を開きます。それまで此処にいてください」

「はあ？こんな茶番に誰が付き合うのよ。私は帰——」

瞬間、私の言葉を遮って沢山の妖怪達が部屋に入ってきた。

慧音、妹紅、レミリア、咲夜、早苗、優曇華、てゐ、紫、藍、橙、命蓮寺の連中に仙人ども、それから馬鹿四人。他にも沢山の妖怪たちがゴタゴタと入ってきた。全員がご丁寧に黒っぽい衣装にドレスアップしている。

突然、狭い部屋に雪崩込んで来たものだから私は外へ行くことが出来ず、中へ押し戻される。

「はいっ、それでは一通り幽々子様の顔見せが終わったところでっ！いよいよ、お葬式を

始めたいとおもいまーすっ!!」

妖夢の大声に妖怪たちは拍手喝采。

いや、拍手で。

「それではまず、何か言いたい人ーっ」

一斉に元氣よく手を上げる妖怪たち。

随分と仲のよろしいことで。

というか、葬式のスピーチを挙手制ってどうなってるんだ。

マイクが三人ほどの手を渡り、妖夢の元へ返った。参考までに言うと、その三人のスピーチはどれもこれも巫山戯たものばかりだった。

「それでは次に、幽々子様からの挨拶です。それでは幽々子様こちらへ」

妖夢がそう言うと、幽々子は棺桶から立ち上がって何時ものようにスイーっと移動していった。

いや、流石の私もこれは予想してなかった。まさか死人からの挨拶を段取りに入れているとは……。

ていうか妖夢は葬式のやり方を絶対に知らない。

「はい、どうも皆様こんにちは。今日は私のために態々、お越しいただき本当に有り難う

「はいごます」

一礼。釣られるように妖怪たちも一礼。

「えー私、西行寺幽々子は死んでからの記憶しかございません。故に、お葬式というものを誰かに開いて貰った記憶も無いのです。そんなの不公平ではありませんか。そして、私は思いつきました。ならお葬式だけでも開いてしまえばいいんだと。私は既に死んでいるわけですから、本質は変わりませんし。今回はそんな私の我が儘にお付き合います、重ねて御礼申し上げます」

まあそんな事だろうとは思った。こいつら妖怪は一々やる事がオーバーなのだ。

「えー今日は無礼講でありますのでこの後、思う存分騒いで頂けると私も安心してあの世に行けます」

葬式が無礼講なんて聞いたことない。それに、此処が既にあの世だ。

「はいっ、幽々子様からの謝辞でした。それでは幽々子様、ゆつくりお休みになられて下さい」

幽々子はマイクを離すと、また静かに棺桶の中へと寝そべった。

「えー、次に人間代表の博麗霊夢さんから乾杯の音頭を取っていただきます」

「はあっ!!」

妖夢が私を無理矢理、立たせてマイクと杯を持たせる。いや、馬鹿じゃないの、乾杯

て。

「……」

「霊夢さんっ早くっ」

「おーいつ早く飲ませろーっ!!」

私が黙っているのと妖夢が急かし、魔理沙が野次を飛ばしてくる。ああ、そういう事か。やっとなかった。

「はあ…… やつとあんたらのはしたくない事が分かったわ。要するにあんたら全員、暇で暇で仕方ないから呑んで騒ぎたいだけなのね」

部屋の何処からか「当たり前だろー」という声上がる。

「そういう事なら、こんな面倒な事せずに早く言いなさい。あんたに言ってるのよ」

いつの間にか棺桶から半身持ち上げて、杯を持つ幽々子に指差すと、幽々子は悪戯っぽく舌をだしてウインクしてくる。ムカつく。

「こういう事なら、何時も通りでいいわね」

一拍置くと妖怪たちの目に喜色が見られる。どんだけ飲み騒ぎたいんだか。

「乾杯っ!!」

「乾杯っ!!!」

○ 始めは部屋にギリギリ入り切る程の人数だった人妖達の宴。いつの間にかその人数は膨らんでいき、皆外へ出て騒ぎ倒すようになった。

下品な笑い声、乱暴な怒号、何故か聞こえる破裂音。酒の肴とでも言うように空には弾幕の花が咲く。

い。 案外、長きを生きる妖怪を初めとする人外の葬式なんてこんなものなのかもしれない。

無限のトートロジー

「ただいまー」

石桜舞い散る春の地霊殿。

そのテラスで一人、本を開いていた私は放浪癖のある妹の声にゆつくりと立ち上がった。

久々に帰ってきた妹の姿にいつも少し大きくなった様な錯覚を覚える。それだけ外にいる時間が長いということだろう。

「一杯、お土産話があるんだよ」

楽しそうに、それでいて無意識に、妹が零れ落とす言葉を聞き漏らすまいと耳を傾ける。どうにも心を読む事に慣れていると妹との会話に違和感を覚えてしまう。

普段は相手の手元のボールを掠め取る作業ばかりしているのに無理やりキャッチボールさせられているような感覚だ。

だがしかし、こいしは私の唯一の妹。そんなことで妹との会話に手を抜く私ではない。

こいしが嬉しそうに語る地上の大冒険譚は本当に楽しそうで、羨ましいと思うこともある。別に、外に出て遊び暮らしたいと言う話ではないけれど、地霊殿に毎日缶詰めというわけでもないけれど、何も考えないでフラフラとするこいしは何時だって楽しそうだ。少し位、思う所が無いわけじゃあない。

ともあれ、今私がこいしの様にサードアイを閉ざしてしまうことは許されない。そうしてしまえば、こいしを守る者がいなくなってしまう。私を地獄へ打ち立てる禊はこいしであり、私なのだ。

それでいいんだ。それを知らぬこいしもそれを知る私もこうして今は笑顔で暮らしている。妖怪にとって過去には然程価値はない。たとえそれが妖怪としての存在定義に障る事だったとしても。

○

覚という妖怪は心を読む妖怪である。

妖怪は基本的に肉体よりも精神に存在としての比重がある為、心の臓を貫かれるよりも心を挟られる方が堪えるのだ。勿論、それは覚自体にも当て嵌められる事で、他の人妖の精神に触れるという事は覚にとつても極めて危険な動作である事に違いはない。

先にも述べた通り、妖怪は精神面が比較的脆い。つまり、それは精神が妖怪を妖怪として成り立たせているという事に他ならないわけで、他の生物たちの心を自己の中から見ると言うのはイメージでいうと、思つた事が直接頭の中へと響く感触に近い。これが何が危険かと言えばそれは即ち、覚の妖怪としての自己霧散である。他の生物の思い、感情を自己に還元して読み取る事で、覚妖怪は自らの抱くあらゆる感情が自己の物であるのか、他者の物であるのか判別がつかなくなる。文字通り自分を見失うわけだ。

そして覚の体はそんな都合良く作られていないわけで、心を読むという動作：：性質に歯止めが効かない。その体外に露出したサードアイが見つめるだけで精神の同期へと導かれてしまうのだ。心の強い、或いは自己を強く確立した覚ならば自己と他者の混同は無くなるが、未熟な覚は直ぐに自分の存在を認識出来ず、消えてしまう。特に産まれたばかりの覚なんかは極めて繊細で壊れやすいのだ。

そして、精神同期で最も危険な対象は同族である。

これは最早言うまでもない事だろうか。

覚が覚の心を読めば、それは合わせ鏡の様に果てしなく終わることがない。「〜と

思っているかと思っていると思っているか……」この状態こそ自己の崩壊を進める一番の近道となりうる。

一人一種の妖怪の様に雌雄を決める事が出来ない妖怪と違い、覚はそれなりに個体が存在する。しかし、どの覚も子を為すとそれを自らから遠ざけるのはそういう事だ。

そして、今ここにも親から捨てられた幼い二人の覚が座り込んでいた。

一人は落ちた蟬の抜け殻の如き脆い心、一人は取り付く島の無い程、頑強な自己を持っていた。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「……」

酷く荒んだ目をした姉のさとり。冬でもないのにガチガチと歯を鳴らせ、コードの伸びたサードアイを抱いて足を三角に折りたたんでいる。

「……じゃあ行ってくるね」

「……」

笑って手を振る妹のこいしにさとりは何も応えない。応えが返ってこない事はこいしも良く分かっている所であり、そこを追求すること無く、子供の作った秘密基地の様

な些末な家から出ていった。

こいしが姿を消すと同時にさとりの震えは止まり、表情にも柔らかさが出てくる。心の弱いさとりにとって妹の覺妖怪は天敵なのだ。己より弱い意志を持った人間くらいならば心を読むことも問題ないだろうが、こいしはそうではない。一緒にいる事が既にさとりにはストレスになってしまう。

さとりは散らかるほど物のない我が家を見渡す。彼女が心治まるのはこうして、こいしが人を襲ったり、人里に盗みに入りに行っているこの時に本を読む瞬間だけであった。昨日食べた人間の残骸の横には沢山の本が重ねられていて、その全てがこいしが姉のために盗んできたものだ。

さとりは、その一番上の本を手にとると親指を噛みながら本を捲った。

○

私は本が好きだ。

絵本であれ童謡であれ、紙の上に垂らされた黒文字や絵の心を読むことは出来ない。私が剥き出しにされることは無いのだ。私を犯すものは何もいない。

私は物語が大好きだ。

他人の作った世界とは言えど、そこには蠱惑的で神秘的な魅力がある。読むだけでその中の住人達と共に暮らしている様な、同じ場面に佇んでいる様な感覚の波に浸れる。

私は妹を愛している。

こいしは弱い私を思つて、私の世話を焼いてくれている。感謝しても仕切れない。たとえ、どんなに私の覚としての本能がこいしを嫌おうと、私という私きこりはこいしを愛している。霞のように薄ぼんやりと漂う私の中でその一心だけは揺るがない。

こいしは強い。

彼女の心はきつと私の何万倍も堅牢だ。

他者の荒れ狂う荒波の如き感情を前にしても彼女が崩れ落ちる事はきつと無い。

でもそれはきつと全てサードアイのお陰。

覚である事のお陰。

妖怪として、こいしとして彼女が強く立っていられるのはこのサードアイが彼女をそう足らしめているから。サードアイが閉じてしまえば、彼女の存在は酷くぼやけた物になるだろう。それこそ私よりも。

なんせ、誰にも定義付け出来ない妖怪となり果てるのだから。

今日、私が辿った物語は王子様が気弱な平民の女の子を数多の魔物から守り、幾多の敵をなぎ倒して結ばれるなんていう、何処にでも転がってる手垢まみれのシナリオだった。そんな平凡で幼稚な話であつたのに、私は何故だか引き込まれた。何故だろう。この気弱な女の子が自分のようだと勝手に思っているのだろうか。

「お姉ちゃんまたそれ読むの？」

「…」

あれから数週間。

私は未だにその本を読み続けていた。手垢まみれのストーリーの端は、いつの間にか私の手垢で黒ずんでいた。

「また、何か盗つて来るから待っててね」

ありがとう。そんな簡単な言葉ですら私の覚は許してくれないらしい。ガタガタと震えるばかりで目も向けやしない。サードアイと本を抱くばかり。

本当に嫌になる。

私のたちの家の壁は薄く、外の物音も時折耳に入る。

ある日、こいしが私の為に外に出ていた時に妖怪たちの話し声が聞こえてきた。

「最近人里の方で陰陽師の奴らが活発になってるみたいだぜ」

「ああ、知ってる知ってる。あれだろ、覚妖怪を殺しまおうってんだろ？確かに豪勢に食い散らしてるらしいからなア。精々俺らと関わりなく死んでくれたらいいんだが……」

間違いなくこいしだ。

この辺に私たち以外に覚妖怪がいるなんて聞いたことないし、私はここから滅多に出ない。陰陽師に目をつけられたのはこいしだ。

どうしよう。どうすればいい。

こいしが殺されるなんて嫌だ。嫌だけど一体私に何が出来るのだ。

頭を掻き巻く手は無意識に本の表紙に触れていた。

相変わらず私の覚はこいしを前にするとどう仕様も無くなるらしい。意識して唇を

嘯んでもガチガチと音を鳴らし続ける。本当に気味の悪い妖怪だ、私は。

今しがた、こいしが人間の死体を持って帰ってきた。盗ってきたという本を二冊手渡されて、こいしが死体を切り分けに外に出た時の事だ。

「きやあつ!!」

「(こ)が覚の巢だな」

こいしの悲鳴が聞こえた。

人間の声も。

ドタドタと家に近寄ってくる足音も聞こえる。私は咄嗟にベッド代わりに積んである藁の中へと身を沈ませて息を潜めた。ガチガチと震える口は相変わらずだが、人間は気付かなかつたらしい。やがて外に出ていく音がした。

「コイツだけみたいだ」

「離してよっ!!」

「誰が離してやるもんか。お前には散々殺されたんだ。生かしちゃおけねえ」

こいしが殺されようとしている今この瞬間だって私は震えるだけだ。

情けない、情けない。

私は本にすがり付いて身を沈ませようと、人間たちにバレまいと、自分だけ助かろうとするばかり。

「さて、そろそろ死んでもらおうかね」

「ごっごめんなさい」っ！ゆ、許してください！」

私は本を片手に持ったまま藁から滑り出る。

服に刺さっていた藁の端を叩き落としながら外に出ると直ぐに人間二人が、倒れるこいしを髪の毛を掴んで無理やり持ち上げていた様子が目に入った。

「あっ!? おい、もう一匹いるじゃねえかっ！」

「クソっ隠れてやがったのか！」

「お、お姉ちゃん!? ど、どうじで…」

こいしは泣いていた。閉ざされたサードアイからは赤い涙が滴り落ちて、こいしの閉じた両の目からは黒い涙が零れていた。

こいしが目を閉じていて良かった。

私が笑ってるなんて知られくないから。

「お、おいつ早くそいつから殺しちまえ!!」

「や、止めてっ!! 人間を襲っていたのは私ですからっ!! お姉ちゃんは関係ないがら

”っっ!!”

この状況は何度も何度も見た光景だ。

弱い者が悪党共にボロ雑巾の様に扱われる。

それを助けるのは何時も決まった王子様。

私の天敵は最早いない。私を犯すものはここにはいない。此処に至り、私は初めて牙を剥く。

「想起——」

「はあ…… はあ……」

「…… お、お姉ちゃん？」

やり切った。

私は成し遂げた。

弱き妹を救った。

人間だったモノの赤絨毯の上は生暖かくて、まるで母親の中を泳いでいる様な安心感を覚えた。何時までも其処に座り込んで自分を抱きしめたかったが、そうもいかない。私にはまだやる事があるから。

「お姉ちゃん……どいっ？」

こいしは弱い。私が救つてやらねば、この傷ついた精神では生き残ることも出来ない。なんて言つたつて今、こいしは覚ではなくなったのだから。

「(ハハ)よ」

「暗い……怖いよ……お姉ちゃん」

私の膝の上でこいしは手を振つて私を探す。

私はその手を優しく掴んで離さない。

「大丈夫……大丈夫よ。私はこいしを離さないわ。絶対に守つてあげるから」

こいしの耳元で、何処かで見たとセリフを並べる。私の言葉となつた文字列はこいしを幾らか安心させる事が出来たのだろう。次第にこいしの呼吸が整つていく。面白いくらい順調だ。

「……だから今はお休み」

全く本当に手垢塗れの稚拙なストーリーだこと。

○

「ただいまー」

旧地獄跡地、地霊殿。

その主たるこいしが外出から戻ってくるとペット達がわいのわいのと囲んで集る。たか

「お帰りなさい。こいし様」

中でもお燐と呼ばれる猫がこいしの足元でお辞儀すると、こいしは屈んで燐に尋ねた。

「お姉ちゃんは起きた？」

何を考えているかも分からない顔で尋ねるこいし。お燐は何も言わず首を振るばかりである。

「そっか… 今日もか」

ペットたちに揉まれた後、こいしは姉の眠る部屋へと足を運んだ。ノックしても返事は返って来ず、虚しさばかりがこいしの心を苛む。

こいしが空気を入れ替える為に部屋の窓を開け、さとりの顔を覗き込むと其処には薄く微笑む顔があった。

最早、こいしではこの姉の心を読むことは出来ない。どれだけ動物達や他の妖怪、人間の心を読めても一番近い姉の心は覗けないのだ。

遠い昔にさとりが目を閉ざした、あの日からさとりは覚でなくなってしまった。今

のさとりを言い表すならば、虚無。無意識に生き延びている哀れな元・覚妖怪である。失ってしまった心を読むことは覚妖怪にも出来ないのだ。

こいしは薄く笑って、さとりの前髪をさらりと撫でると立ち上がり、部屋から出ていった。

動くものの消えた部屋。

開いた窓から吹き出る風が、さとりの枕元に置かれた汚い本の表紙を持ち上げた。

パラパラと捲って止まったページ。

王子様と気弱な女の子が笑顔で手を繋ぐページに迷い込んだ石桜の花弁が静かに落ちた。